



TITLE:

海外日誌(十八)

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 海外日誌(十八). 天界 1924, 4(44): 325-329

ISSUE DATE:

1924-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160156>

RIGHT:

海外日誌 (十八)

Harvard College Observatory,
Cambridge, Mass., U. S. A.

山本 一 清

大正十三年 (一九二四年)

一月一日 (火)

こゝはハートフォード神學校の寄宿舎の一室。昨夜から岩上、横田兩君と語り續けて、さうく語り越して新年を迎へた。午前二時床に入る。

七時起床。横田君の案内で、食事の後、電車の乗り場まで歩き、八時九分發に乗つて雪空の寒さの中を、ミドル・タウン市のウエスレイヤン大學に天文臺を訪ふ。スローカム臺長に迎えられ、新しい建築のあちろちろ、圖書室、地下實驗室、子午儀室、寫眞測定室、二十時赤道儀ドームの順に案内して貰ふ。二十時の接眼部や其他、建築の外側を二三回カメラに収めた。概畧するに、此の天文臺は總ての設備がヤーキースを小さくしたやうなもので、大ドームの床の上り下りまで、誠に好く出来てゐる。しかし、新し過ぎて、實驗室は未だ使はれてゐない。

正午、臺長の宅で御馳走。臺長はそれから旅行に出掛けるさう。自分ほ之の電車線により、ハートフォードに歸る。途々、メイン街からブシネル公園に出て、トラベラー塔やカピトルの寫眞を撮り、三時頃、又、寄宿舎に歸る。

午後五時三十五分、兩君に見送られて、ユニオン停車場より乗車。キリマンテクを経て、九時ボストン着。九時半ケンブリヂに歸宅、正月の土産物一ぱいの大カバンを引すつて。

一月二日 (水)

午前中、天文臺へ行つた。やはり、皆平氣で勉強してゐる。(昨年

もさうだった、ペーで。アメリカ人は「御正月」に無神経だワイ。

正午、宅で御雜煮を祝ふ。之れはニウヨーク行きの御利やく。やはり之れでない日本人はいけないものと見える。午後はホリデーと獨り決めに決めて新聞など讀む。

一月三日 (木)

ワシントンのアボット氏へ昨秋の太陽研究の報告の殘りを全部發送した。

一月四日 (金)

新聞で、京都の海老名彈正氏が來着せられたと聞いたものだから、今朝十時半ボストンのビーコン街の組合教會傳道部へ行つた。ビルグリム室で婦人會に出席中、果して海老名氏來場、日本に震災について短かい演説をせられ、其の後すぐ面會した。

午後天文臺で讀書。

一月五日 (土)

雪で寒い!!

午後三時よりボストンのゲイクトリア・ホテルへ、日本協會の新年レセプションに招かれて行く。(英子は和装に新しいクープ) 日本人側の出席者に海老名氏もゐられたが、他は多く男女の學生であつたが、此の機會に多くの友人が出來た。五時半歸宅。

夜、谷川氏と、ミス井上とが來られ、暫く話す。

一月六日 (日)

天文臺でカンベル氏の談によれば、變光星觀測者會の報告に、日本からは中村氏の外に宮島、河西兩氏からも來た由。大に喜んで居られた。

朝、溫度十八度(華氏)の外氣温である。九時に起きた。それでも十一時から大學のアブルトン會堂へ禮拜に行く。

一月七日 (月)

午後是在宅、讀書。

此の星に關して取扱つた寫眞板の数は約一千八百枚である。

御晝には、日本式に、七草粥を食べたのは乙であつた。

午後、天文臺で、キンガ教授の紹介により、ヘルから歸られたばかりのS・I・ベリール教授に出會つた。七十歳の老人であるから、いかにもさ肯れる節もあるが、しかし、元氣があつて、親切で、やさしくて、好い人である。四年前、自分は佐々木拜星の電報を此の人に宛て、打つたのだ―そんな事も話した。

英子は午後三時半頃からキンガ夫人と共に植物會に行つた。

一月八日(火)

朝、天文臺で、鱧座RR星のフィールドを搜した。

午後三時半から、大學のセミチク博物館内で、ライオン教授の聖地パレスチナ發掘に關する講演をきいた。今日のは第一回で主として聖地の地理及び動植物地質等の説明であつた。歸りに、獨逸文化博物館を見た。之れは思ひがけ無い立派なものである。歐洲へ渡るまでに幾度も此れを來觀して勉強してをきたいと思つた。

夜八時よりエマーソン館でエール大學のダニエル教授の「アメリカの鐵道問題」といふ講演をきく。

一月九日(水)

午前中、天文臺で鱧のRR星の寫眞板を検査す。

午後には讀書。英子はブラク氏宅へ行く。

一日十日(木)

此の二三日非常に溫暖で、路上の雪はすっかり消えて了つた。今日日中の溫度七十度!!

午前中、相變らず鱧座RR星の寫眞板検査。

午後二時よりセミチク博物館へ行き、暫く、階上の陳列品を見る。エルサレム市の模型は好いものだと思つた。ライオン教授の講演は三時半からで、主としてサマリア市に於ける一九〇七年頃のヘーブード大學發掘隊の事業の話であつた。之れで、此の講演は研究報告書發表の記念講演と知れた。―講演後、自分は暫く教授と話す。報告書一部四十弗さきいて驚く。

夜八時から、ブラク氏の奴意により入場券を買つて、大學記念館のサンダース劇場でポストン・シンフォニー・オーケストラをきく。

一月十一日(金)

今日は大風雨。

午前中、天文臺でやはり鱧座RR星の寫眞検査。

夜八時から天文臺公開。ウエスレイ大學のダンカン教授が「星雲」について講演をした。同氏が以前ウィルソン山で撮つた星雲寫眞など立派なものがあつた。

一月十二日(土)

鱧座RR星の寫眞を連日検査して、ほゞ揃つたので、今日は附近の比較星の光度を測つた。

一月十三日(日)

朝十一時、大學アブルトン・チャヘルで禮拜。

夕方、英子と共に、コンコード通りのE・S・キンガ教授宅を訪問、二三十分いろいろの話をして歸る。

一月十四日(月)

午前中、ミス・ウツと二人で鱧座RR星のための比較星の光度を測定した。

夕方、五時より大學ジエファソン物理學實驗場で物理學談話會ミリケン氏がバンド・スペクトルの事を説明した。

午後八時からエマーソン館で、ベク教授の教會音樂史の講演をきく。今夜は主に十二世紀までの頗る古い時代の話であつたが、平素の疑問が解けた點が多く、大に興味があつた。

一月十五日(火)

午前中、鱧座RR星の光度をはかる。

午後三時半からセミチク博物館でライオン教授の第三回パレスチナ講演。今日の題は「聖書テキスト証明としての聖地發掘事業」―英子も聴講した。席に日本人好きの「婦人が居て、いろいろ話す。」

夜八時からポストンのローエル學院に於けるペリオ教授の講演「中央アジア史」の第一回をきく。フランスなまりの非常に分りにく

い英語であつたが、幻燈講の立派なのに釣られて聞いた。席に日本から歸つたばかりの宣教師がゐられ、日本語で話した。歸途、新聞で、日本に再び地震があつたことを知つた。

一月十六日(水)

午後、突然、室住氏の案内で東京高等工業學校の牧田教授が當地の後藤田氏と三人同道で天文臺に來られたので、器械や建物や星の寫眞などを一通り見せた。それから一行はオ、バーン通りのクレイギー館(詩人エマーソンの舊宅)を見に行くと言はれるから、自分も一所に行く。

一月十七日(木)

蠟座RR星の光度について、一九二一—二三年間の検査をすました。之れによる、シヤブレレイ氏の注文の第二最小光度期は見つからない。たゞ、インネスの出した週期が誤りであつたことが知れた。午後三時半からセミタク博物館でライオン教授の最終の講演をきく。題は「エルサルムと其の將來」で、少しばかりシオン運動の説明もあつた。

午後六時から、シヤブレレイ教授と共に、招かれてボストン市民クラブの晩餐會に行き、ヘープ氏の斡旋で、食後、自分は十五分ばかり演説をした。其の結びに、

「吾々の天文學上では國と國との境界などを認めません。若し、日本人やアメリカ人のみならず、世界中の人々が、多少づつでも天文家になるならば、今日紛争の種になつてゐる國際的境界などは無くなつて、人は皆コスモポリタンとなり、世界同胞の理想を實現することが出來ます。私の一つの理想は此れであります」

と、平常の持論を吐いたところが、大喝采であつた。其の後別の大講堂で「生命」といふ題のシムボジウムにシヤブレレイ、ジェフレイ、レーキ三教授が、それぞれ「宇宙論と生物學と哲學の方面から講話をした。十時歸宅。

天界一月號來る。

一月十八日(金)

蠟座RR星の比較星に變光をやつてゐるものが一つ見つかった。夜八時からローエル學院でペリオ教授の第二回講演「支那佛教史」をきく。

一月十九日(土)

いくら検査して見ても、蠟座RR星の第二極小は無いらしい。少々いやになつて來た。

一月二十日(日)

朝十時半、忘れ物を取りに天文臺へ行つたらキング教授が來てゐられた。それから自分は大學アアルトン會堂で禮拜。シカゴ大學のソアレス教授が「愛國主義か基督教主義か」といふ題の説教し、強く宗教の權威を高調した。式後、藤原上井兩氏は同道して歸宅。英子と一緒にうごんを作つてすゐめた。

夕方、兩人でセントラル廣場まで散歩。

一月二十一日(月)

正午、宅へ食事に歸る時、キング教授につかまり「一寸、御出なさい。見せるものがあります」と言はれる。まゝに、教授の宅に入つて見ると、「近頃或る古本屋でさがしたので」と言つて、一六〇五年版の「宗教書」を見せられた。

夕方、散歩。大に寒い。

一月二十二日(火)

今日も蠟座RR星の光度をしらべたが、第二極小は全く見つからず、只第一極小時刻の移動を確かめたのみ。

一月二十三日(水)

朝、天文臺の圖書室でゲリシ教授と出會ひ、レンズ製造家として當市の有名なオルバン・クフク及び其の會社の事につき、いろいろ面白い話をきかされた。かつて出會つたワリー氏やスエジー氏といひ、此のクラーク氏と言ひ、何れも、天文器械を作るやうな工業家は、天性に於いて普通の實業家と全くタイプの違ふことを深く感じた。彼れ等は金儲けの人でなく、むしろ、藝術家である。

午後二時から、英子と共にボストン行き。セルバン劇場で目下大

評判のシエン・カウル一派の「ロミオとジュリエット」劇を観る。舞臺裝飾は新味があつて好いと思つたが、新聞で書き立てゝゐるほどの俳優ではないと見る。

一月二十四日(木)

蠟座R星は止め。次は水蛇座W星に手をつける。此の星が一九〇〇年以來殆んど觀測されてゐないのは不思議である。自分の調査はウイリソン山のメリル氏の要求によつてやるのであるが、さにかゝ、此の星の光度差も週期も光度曲線も皆殆んど分つてゐない。

今日、夕方、ハーバード大學カレンダーの新版を買つて、始めてライテン君が、天文臺ではアストロノマーであり、大學では物理科學生であることを知つた——なるほど便利なことが出来る。

一月二十五日(金)

午前中、水蛇座W星の比較星を撰定。

午後、獨りでホストンへ行き、コーンヒル通りの四五軒の古本屋とパーク通のグドスピード店とを見、グトスピードにローエル天文臺年報第三巻があつたのを見つけた。

夕食に室住氏を招く。

一月二十六日(土)

日本では東宮御成婚の日で、當地の各新聞も兩殿下の御肖像など出しゝゐる。

自分は、午前中、天文臺で水蛇座W星の比較星の光度を測定した。

一月二十七日(日)

寒くて、午前中は室内に讀書。

午後六時、招かれてキング教授宅で晚餐をいたゞく。晚餐と言つても今日は日曜だから、皆がパローアに集まつて、膝の上でスーパを食へたに過ぎない。——これでも好いものだナアと思ふ。

一月二十八日(月)

御膳立ては出来た。今日から水蛇のW星を測り始める。星の南緯が三十一度なので、ケンブリヂとアレキバと兩所での寫眞が利用し得られる。それだけ材料は豊富だ。

午後六時からホストンのコロネバス街柳川亭で學士會の晚餐會。ヤンキー嬢の御給仕ですきやきと振つてゐる。集まるもの鈴木(憲)、野村、室住、中井、仲小路及び自分の六名と、丁度暫く前、歐洲から歸りがけに來着した鈴木(義)、金尾の兩氏。十二時近くまで色んな話す。

一月二十九日(火)

朝、室住氏來訪、レデオの事や、一般の最近物理上の色々な問題について雑談。十一時から天文臺に出かけて、水蛇のW星を測る。

水野千里氏から年賀狀。

一月三十日(水)

朝、C館の天體寫眞の室へ水蛇のW星を測りに行つて見ると、机の上に、東宮と良子兩殿下の繪入の新聞記事を切りぬいて置いてある。——ミス・カノンの親切であつた。

今日は大に暖かい。

一月三十一日(木)

午前中、例の水蛇座W星の光度測定。意外な結果が既に見え出した。週期は三百八十九日位で未だ正確ではないが、光度差は、六九等から一〇・二等まで、三等級以上に及び、光度曲線は普通のミラ型とは少し異なる模様らしい。又、定常の位相が無い。

夜八時から天文臺公開、ベイル老教授が一ペル及びチリに於ける出張天文臺の話しをせられた。いつもながら堂々満員以上で、十人ほどは席無しに立つてゐる。空は珍らしく晴れてゐるが、寒い。

日本の議會解散の報至る。此の解散は豫期してゐなかつたわけではないが、只此の解散の動機が、特別汽車の顛復計畫や議場混亂やらでは驚かざるを得ない。昨年の震災以來、日本の社會は一般に大に興奮してゐるらしい。もつと落付かなくては。

二月一日(金)

朝十時から天文臺で、海蛇座W星の研究例の通り。新聞によれば、前の大統領ウイリソン氏の病氣が重くなり、危篤さのことである。

二月二日(土)

朝、銀行へ寄つて、それから天文臺行き。

天文臺のCビルディングの窓から眺めると、正面に當る北ボストンの空が非常に烟つてゐる。あたかも大火事のやうだ。太平洋からの風の吹きまはしによるのだろうが、夜間こんな風に攻められては、天文の仕事などは散々だと思ふ。現代都市は天文には禁物だ。

二月三日(日)

かれて水野恭介氏の御招きにより、今日は室住野村兩氏と共に、四人で、セーレム行き。朝十時五分の汽車で北停車場を發し、セーレム驛で水野氏を迎えられた。外は曇り空で、可なり激しい雪が降つてゐる。其の中を、水野氏は先頭に立つて、ダービー街を案内せられ、先づ有名な昔の税關、それから文豪ホーソーンの小説で名高い七・破風の家を見、午後一時頃、モールス教授を訪問。同教授は動物學者として、明治の初年日本東京大學に雇はれ、實に日本の動物學を開いた恩人である。八十の老翁であるが、元氣よく吾々一行を迎へられ、廣々とした書齋で暫く雑談。教授は陛下より賜はつた勳一等の旭日章などを出して來て見せられる。それから、教授宅で午餐を頂き、辞して、又下町へ行き、ビーボデー博物館やエセクス館を見た後、四時頃オーシャン臺のアダムス家に招かれ、晚餐をいただく。食事中、ローズモンド嬢の口から、前大統領ウイルソンの逝去の報をきいた。

午後八時半、セーレム發でケンブリヂに歸る。

二月四日(月)

朝十時から天文臺、やはり海蛇座W星の研究。

ロンドンよりの通信により、昨年十二月十四日の英國ロイヤル天文學會例會席上で自分がフエローに推薦されたことを知つた。

二月五日(火)

おひるに宅へ歸るさき、天文臺からベイリ教授とコンコード街を同道したが、歩道は雪が多いため、左側車道にある。老人と雖も大膽なものだ。

夕食に室住野村兩氏をまねく、それから十一時頃まで世間話。

二月六日(水)

今日はワシントン市では故ウイルソンの葬式が行はれ、從つてオフィスは一般に休業してゐる。天文臺でも、Aビルディングの入口には大きな星條旗が半ば掲げられてゐる。しかし、人間離れのしてゐる天文臺内部では、人々が例の如く研究を續けてゐる。自分は海蛇座W星の研究終る。結果、變光週期三百八十五日二、光度は七・九等から一〇・二等の間に變する。

二月七日(木)

天文臺の前庭で、小供達が氷すべり雪すべりをやるワ。夕方、水野(セーレムより)、室住、野村三氏を招いて晚餐を共にす。

二月八日(金)

ミス・カノンに蠟座RR星の研究結果をわたす。シヤブレイ氏の注文にかゝらず、此の星には第二極小期が見付からない。尚、インネスの發表した變光週期は少し誤つてゐる。正午、天文臺の庭で雪すべりに群がる少青年たちの騒ぎ振りを寫眞に撮つた。

夕方、獨りでボストン行き。グッドスピードの古本屋を見た後、コロンバス街の柳川亭へ行き、ニウヨークより來た赤木氏や、他の學生達と會して、先づ日本學生基督協會創立の件を相談し、七時頃から晚餐會となつた。十時歸宅。

二月九日(土)

今日から、シヤブレイ氏の委嘱によりマセラン星雲中の變光星を研究することとなり、Cビルディングに席を一つ與へられた。夜、招かれてボストンのコンモンエルス街にミス・シアウツドを訪問、會々來市せられた吉田博壽伯夫妻と會つた。齋伯は近日當地で日本織の展覽會を開かれる筈。

二月十日(日)

寒くて終日家の中にゐる。夕方、一寸、スクエアまで散歩。